滑膜肉腫の治療経験

宮崎医科大学整形外科

津 曲 孝 康・桑 原 茂
福 田 健 二・柏 木 輝 行
山 本 恵太郎・田 島 直 也

Treatment of Cases of Synovial Sarcoma

by

Takayasu Tsumagari, Shigeru Kuwahara, Kenji Fukuda,
Teruyuki Kashiwagi, Keitarou Yamamoto and Naoya Tajima

Department of Orthopaedic Surgery, Miyazaki Medical College

We experienced 5 cases of synovial sarcoma of the lower extremity from 1990 to 1994.

All patients were treated with adjuvant chemotherapy and surgical treatment. CDDP, ADR, IFO, CBDCA, CYVADIC and HD-MTX were used for adjuvant chemotherapy, protocols. One case treated with a BK amputation and CDDP and another case treated with limb salvage and CDDP, ADR, IFO were judged to be successful. One case received CDDP, ADR, IFO and an AK amputation. Two months later enlargement of their metastatic lung tumor was noted, so adjuvant SYVADIC was started. 3 weeks later, the tumor size was diminished, and this response was judged to be a PR.

Key words : Synovial sarcoma (滑膜肉腫), Chemotherapy (化学療法)

はじめに

滑膜肉腫は、肉腫では頻度の高いものであるが、腫瘍発見時より滑膜肉腫として診断される事は困難な事が多く、腫瘍摘出術後の病理検査にて滑膜肉腫として診断され、その後緊急搬送され治療を受けるものも少なくない。今回我々は、5例の滑膜肉腫症例を経験し、検討を加え報告する。

対象および方法

平成2年6月から平成6年10月までに当科で手術および化学療法を施行した患者5例を対象とした。男性4例、女性1例であり、手術時年齢は16才から49才、平均34.4才であった。発生部位は、全例下肢(膝3例、下腿1例、足関節1例)であった。初回手術は、他医で単純切除術を施行した症例が2例あり、

当院にて追加手術および化学療法を施行した。残りの3例は広範切除術および術後化学療法を施行し、内1例に術前化学療法を行った(表1)。

結 果

良性腫瘍として単純切除術を他医で施行され、術後病理検査で滑膜肉腫の診断を受け化学療法目的にて入院治療を行った2例に対してHD-MTX及びCYVADIC療法を施行した。1例は術後1カ月目に同鼠径部のリンパ節の転移を起こしリンパ節郭清術施行した。その後6クールCYVADIC療法⁴⁾施行するも術後10カ月目に再度鼠径リンパ節転移を引き起こしDODの転帰をとった。残り1例は、3クールHD-MTX施行するも効果なく、その後3クールCYVADIC療法を施行したが、肺転移を起こしCDFの状態である。

表 1

症例	組織亜型	年齢	性別	発生部位	初回手術	補助化学療法	追跡期間	予後
1	二相性	49 歳	女	右下腿	広範切除	○	9M	CDF
2	単相性	39 歳	男	右踵部	広範切除	○	2Y2Y	NED
3	二相性	16 歳	男	右膝窩部	単純切除	○	3YH1M	CDF
4	二相性	35 歳	男	右膝	広範切除	○	9M	CDF
5	単相性	33 歳	男	右膝	単純切除	○	1Y1M	DOD
		(平均 34.4 歳)						(平均 18.8M)

図 1 胸部 CT にて腫瘍の縮小化及び空洞化が認められた。

図 2 Kotz 下肢再建術

広範切除術 (AK amputation) を施行した 1 例は手術前より胸部 CT にて転移が認められていた。術後 CDDP, ADR, IFO の 1 クール化学療法を施行するも肺転移巣は拡大傾向にあったため CYVADIC に変更した。胸部 CT の腫瘍判定では partial response の効果判定があり肺内腫瘍の縮小化及び空洞形成が認められた (図 1)。足関節の滑膜肉腫症例に対し広範切除 (BK amputation) 後 CDDP 2 クール, CBDCA 2 クールを施行し, NED の状態で社会復帰している。また広範切除術及び患肢温存術を施行した症例に対し CDDP, ADR, IFO 2 クール施行したが, 術後 7 カ月経過した現在, 局所再発, 肺転移なく良好な経過をとつ

ている (図 2)。

考 察

深谷ら²⁾ は, 単純切除後 CYVADIC 療法施行するも NED の結果であったと報告し, 浅野ら¹⁾ は, 2 例に対して SYVADIC 療法を施行したが, ひとつの化学療法の regimen だけでは十分な結果が得られず, 化学療法の変更をする結果になったと報告している。今回我々の滑膜肉腫の化学療法でも CDDP, ADR, IFO, CBDCA, CYVADIC, HD-MTX と単一の化学療法で十分な regimen が得られず, 変更せざるをえなかった。現在までに術後転移なく経過良好と思われた症例は BK amputation 後の CDDP, CBDCA を使用した症例と広範切除後患肢温存術及び CDDP, ADR, IFO を使用した症例の 2 例であった。病理組織型は各々単相性と二相性であり今回の症例においては特に二相性が予後良好というものではなかった。杉原ら⁵⁾ も組織亜型と予後の関係は明らかな傾向がないと述べている。症例 1 において術前より肺転移巣があり AK amputation を施行し, 術後 CDDP, ADR, IFO を 1 クール行った。術前 CT と術後化学療法後 CT を比較すると拡大傾向にあったため, CYVADIC 1 クール使用した。治療後の胸部 CT にて PR の判定効果を得ており CYVADIC の反応があったと考えられた。症例 3 において初期に特に他臓器転移のない症例に対し HD-MTX 3 クールの化学療法を施行した。しかし術後 5 カ月目に同部に腫瘍が MRI にて確認され CYVADIC 療法に変更した。しかし胸部 CT にて転移巣及び同部の MRI 検査にて腫瘍の増大傾向があり, CYVADIC の効果はないと判断した。

5 症例を通して初期治療で単純切除を受けた 2 例は術後化学療法施行するも肺転移および DOD の結果に終わっており, 深谷ら²⁾ は, 十分な外科的切除による局所コントロールが治療の原則であり, 当初より根治

表2 術式および化学療法による検討

症例	初回手術	化学療法	局所再発	追加手術	転移	予後
1 広範切除 (AK amputation)		CDDP+ADR+IFO ↓ CYVADIC	—	—	肺	CDF
2 広範切除 (BK amputation)		CDDP, CBDCA	—	断端形成術	—	NED
3 単純切除		HD-MTX, CYVADIC	○	単純切除	肺	CDF
4 広範切除 (患肢温存術)		CDDP+ADR+IFO	—	—	—	CDF
5 単純切除		CYVADIC	—	右鼠径部腫瘍摘出術	リンパ節	DOD

CDF ; continious disease free, NED ; no evidence of disease, DOD ; dead of disease

手術を施行する事により予後改善の可能性が認められたと述べており、また広田ら³⁾も治療成績を向上できる治療は、局所的及び全身的な治療性を目標とした広範切除術と系統的化学療法の併用であると述べており、今回の症例でも滑膜肉腫を考慮した場合、十分な外科的治療と効果のある化学療法を行わなければ予後良好な結果は得られないと思われた。

症例4のように広範切除術、患肢温存術(Howmedica社のKotz下肢再建)を使用した例(図2)では患者自身のQOLを高め、また切断肢の患者と比較し術後経過も良好である点より今後期待される手術法であると思われた(表2)。

ま と め

①我々は最近滑膜肉腫5例を経験したので報告した。

②2相例に対しCDDP, ADR, IFOの効果はなかったが、CYVADICにて効果反応例1例を経験した。

参 考 文 献

1) 浅野昌育ら：滑膜肉腫 monophasic type 化学療法について。中部整災誌, 35 (1) : 274-275, 1992.
2) 深谷直樹ら：滑膜肉腫 14 例の治療経験。中部整災誌, 36 (6) : 1997-1998, 1991.
3) 広田茂明ら：滑膜肉腫の治療成績。臨整形外, 23 (10) : 1173-1178, 1988.
4) 守田哲朗：術前化学療法, 図説整形外科診断治療講座 11, 骨腫瘍, メジカルビュー社 : 144-155, 1990.
5) 杉谷進介ら：滑膜肉腫 13 例の治療経験。日整会誌, 66 (6) : 807, 1992.